

## マレーシアにおける教育視察に参加して

木場雪香

群馬大学大学院教育学研究科

### 1. きっかけ

異文化理解は現代のキーワードであろう。教育界でも推奨されており、世界の教育制度等を比較検討する学問領域がある。教員養成系大学では、海外の学校で実際の授業の参観や、様々な教育プログラムに参加する短期長期のインターンシップの機会を提供している。

海外の学校に興味を持っていた私は、最初にアメリカの教育視察プログラムに参加した。渡航前に抱いていた想像と違い、参観した小学校における家庭科の扱いは日本より非常に小さなものを感じた。日本と海外の家庭科教育について、比較教育学の視点を得る研修となった。

帰国後も授業等を通じて関心はふくらみ、海外における家庭科という教科の有無や類似した内容の別科目があることなど、これまであたり前に学んできた家庭科の意義や価値を再認識した。こうした経緯から、次ぎにマレーシアの教育視察プログラムに参加し、卒業研究において家庭科がないマレーシアにおける、家庭科と類似した科目「健康教育 (Pendidikan Kesehatan)」の教科書を用いた比較検討に取り組んだ。

### 2. マレーシアという国と「健康教育」

教育視察に行くまで、マレーシアという国のことをほとんど知らなかった私は、基本情報を一通り入手した。その中で教育に大きな影響を及ぼしているのが民族構成だ。マレー系 66%、中国系 25%、インド系 8% であることから、言語や宗教、生活習慣、通学校も異なる。単に教科の内容を比較するだけでは理解できない背景があることを知った。マレー系民族の多くがイスラム教徒であることから、衣食住、家族といった家庭科の学習内容全般に戒律や禁忌と深い関係がある。

マレーシアの1日は朝5時のアザーン（礼拝の呼びかけ）から始まる。学校で居眠りする子どもはいないのか気になる。ICT 教育が盛んで小学2

年生からプログラミング教育が行われていた。日本でも2020年から必修化される。

熱帯気候のため、教室や体育館など建物天井には大きなファンが設置されており、健康教育では、暑熱ストレスへの対処方法について学ぶ章がある。マレーシア保健省や新聞記事の検索から、2013年に子どもの熱中症死亡事故（車内置き去りが原因）、2016年にマレーシア成人初の熱中症死亡事故が見つかった。これ以降、保健省では注意喚起を促すリーフレットを発行している。

小・中学校制服では、女子のヒジャブ（頭部用スカーフ）着用が義務付けられており、子ども達はとても暑いと言っていた。私も猛暑の日本で着用評価を試みたが、数十分の着用が限界であった。

健康教育の内容で最も驚いたのが、性教育が小学校から導入されていることであった。イスラム教の法律上、女兒の最低結婚年齢が9歳であることから考えると、家族や婚姻など日本の家庭科や保健体育では高校で扱う内容が児童からあることは何ら不思議ではない。

### 3. まとめ

民族に応じて制服や給食、教科が選択出来ることは多文化理解そのものであり、日本の教育制度とは大きく異なる。先生方の服装も、マレー系ならバジュ・クロン、インド系ならサリーといった民族衣装を身につけており、とてもステキだった。家庭科に関連する教育が社会制度を含めた各国の生活文化の現れであることを今回改めて学ぶことが出来た。今後は、日本の家庭科の原点を学ぶとともに、家庭科の国際的な位置づけについても研究していく。

---

<連絡先> 木場 雪香 (Koba YUKIKA)

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2

群馬大学大学院教育学研究科

Eメール: e181k001@gunma-u.ac.jp